

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	乙第1179号	氏名	天正恵治
論文審査担当者	主査 角谷眞澄 副査 本郷一博・栗田浩		

### (論文審査の結果の要旨)

前十字靭帯再建術に際して、大腿骨側は前十字靭帯付着部周囲の骨性指標 (bony landmark) の存在が広く知られ、これを参考にすることで正確な位置に骨孔を作成する事が可能となった。天正は先行研究にて前十字靭帯脛骨付着部周囲にも特徴的な3つの bony landmark (anterior ridge, lateral groove, intertubercular fossa) が存在する事を確認し、①これらの landmark と実際の前十字靭帯の付着部との関連性、また、②その出現頻度を調査した。

その結果以下の成績を得た。

- 1) 3DCT 上全例で anterior ridge, lateral groove, intertubercular fossa を確認することが出来た。
- 2) 肉眼的に anterior ridge は付着部の前縁を形成していた。Lateral groove の位置には外側半月板が付着し肉眼的に確認できなかった。後方では intertubercular fossa は肉眼的に確認できなかったが、相当する部位には靭帯は付着していなかった。
- 3) 組織学的な評価では、全例 anterior ridge は ACL 前縁に一致していた。また、12 例中 11 例で lateral groove 底部に ACL は付着し、外側半月前角と隣接していた。また intertubercular fossa には靭帯の付着は組織学的にも確認できなかった。
- 4) lateral groove は外側半月板前角と、intertubercular fossa は medial/lateral intercondylar tubercle 前縁と一致していた。
- 5) 3DCT 上、60 膝中 59 膝(96.6%)で anterior ridge, intertubercular fossa を同定でき、lateral groove は全例確認する事が出来た。

考察：前十字靭帯脛骨付着部周囲にも特徴的な bony landmark が高頻度に存在する事が判明した。今回の研究で得られた landmark は臨床での骨孔作成時の指標として有用な情報となりうる可能性がある。

したがって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。